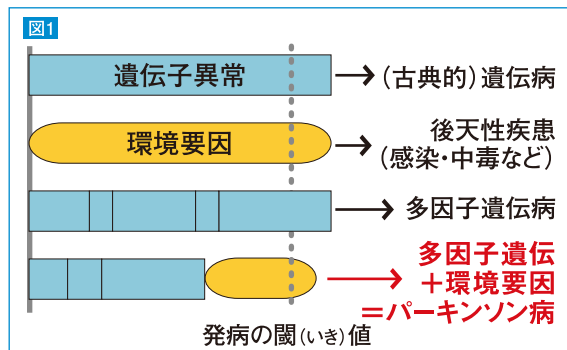


# パーキンソン病医療の最前線

## 原因に迫る: 遺伝子研究の話



パーキンソン病は、神経内科の病気の中で最も精力的に研究されており、かつ良い治療法がある病気です。原因はまだ不明ですが、

いろいろな異常が発見されています。こうしたものは将来の治療に結びつく可能性があります。マスコミで紹介されるほどのもものは、今後の研究を待たなければ真価がわからないものです。従って、報道記事に一喜一憂することは止めましょう。

### 遺伝子研究と発病原因

最近のパーキンソン病の原因研究の一端を紹介しましょう。

遺伝子の研究には、遺伝があるかどうかを調べるものと、遺伝子の機能を研究するものとに分けて考えられます。大部分のパーキンソン病は、通常は遺伝病であると

考えられています。

図に示すように、パーキンソン病の発病には遺伝子の働きと環境の両方が関係していると考えられています。もちろん、限られた少数の家族性のパーキンソン病もあります。こうした病気を起こす遺伝子を見つけてその機能を知ることとは、病気の発症メカニズムを知り、治療法を開発する上で大切です。遺伝性のないパーキンソン病も何らかの遺伝要因が関与していると理解されていますが、これは一部の糖尿病の遺伝のようなものとは異なります。

### 遺伝性と非遺伝性

パーキンソン病では、特定の遺

伝子の変化があると発病の危険が高くなることが分かっています。それでも、異常を有する時に必ず発病する遺伝子異常はまれなものです。いくつかの遺伝子異常の複合的な関連(多因子遺伝)と、図のように何らかの環境要因が相互に關与して発病するのであろうと思われま

す。中年以降に発病する通常のパーキンソン病では、遺伝に関しては心配ないといえます。しかし、40歳以下の若年性の発病では、遺伝子の関与がより強いと考えられます。その遺伝子異常を見つけるには家族性であることが分かればい